



小麦の収穫後の管理について

収穫後のほ場では、降雪までの期間が長いことから、緑肥作物栽培による地力向上を図ります。肥料高騰の中、ほ場副産物を上手に利用し、低コストを目指しましょう。

また、耕起前の雑草対策も検討しましょう。

(1) 緑肥作物のは種

ほ場内に残った麦稈は、チョッパーで裁断し分解促進させ、ロータリーなどで整地します。緑肥は、ブロードキャスターやドリルでは種後鎮圧をします。緑肥の効果発揮のため、適切な施肥と早期は種で、生育量の確保に努めましょう（表1）。

また、キタネグサレセンチュウ対策には、えん麦野生種が有効です。

緑肥のすき込みは、分解を促進するため、チョッパー等で細断シプラウですき込みます。

表1 緑肥の種類と特徴

緑肥作物	時期		は種量 (kg/10a)	施肥量 (kg/10a)			作付効果
	は種	すき込み		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	
えん麦	8/上～中	10/中～下	15～20	4～6	5～10	0～5	有機物補給、雑草抑制
えん麦野生種 (ハイオーツ等)	8/上～中	10/中～下	10～20	5	5	0～5	有機物補給、キタネグサレセンチュウ抑制、 落葉病軽減
シロカラシ	8/上～下	10/中～下	2	5～8	5～10	0～7	有機物補給、易分解性窒素供給、 麦稈のC/N比調整、景観形成
ひまわり	8/上～中	10/中～下	1.5～2.0	4～6	8～10	0～10	有機物補給、菌根菌効果、景観形成

(2) 多年生雑草、異品種連作対策

イネ科、多年生雑草の除草処理は、耕起前の時期が最適です。連作の場合は、異品種混麦防止のため必ず雑草処理を行い、15cm以上に再生してから散布します。なお、種子馬鈴しょほ場周辺では、生産された種いもが萌芽不良を起こす恐れがあるため、グリホサート系除草剤の使用は控えます。

表2 麦類の耕起前雑草茎葉散布除草剤例（各地域の防除ガイドを確認ください）

薬剤名	有効成分	使用時期	使用量 (/10a)	回数
クサトリキング	グリホサートイソプロピルアミン塩 41%	耕起前まで (雑草生育期草丈 30cm 以下)	250～500ml (水量 25～100L)	3回以内
タッチダウン iQ	グリホサートカリウム塩 44.7%	耕起3日以前(雑草生育期)	500～750ml (水量 25～100L)	1回
ラウンドアップ マックスロード	グリホサートカリウム塩 48%	耕起前・雑草生育期	200～500ml (水量 25～100L)	3回以内

注1：展着剤は加用しない。

注2：散布後一定時間降雨のない日に散布する(剤によって1～6時間)。

注3：周辺の作物に薬液がかからないよう注意し、ドリフト低減ノズルの使用が望ましい。

注4：少水量散布の場合は、専用ノズルを使用する。

農作業環境のリスク管理で農作業事故を防ごう！！